



「普天間飛行場⑤」

新城古集落 宜野湾市の偉人である佐喜真興英氏の名著『シマの話』には、氏の出身地である明治末頃の新城の人々の暮らしが詳しく紹介されています。そのゆかりの地である新城古集落は、現在でも普天間飛行場の中にあって、戦前来的屋敷林や石垣などがあり、地中には約三百年前の屋敷跡などが残されています。

二〇〇三〇センチ程の小穴群で、一四七七年に漂着した朝鮮人が記録する掘棒耕作を裏付けるものです。本遺跡は、戦後まで畑跡が続くことから、沖縄諸島における植物栽培と農業技術の移り変わりを知るうえで重要な歴史・文化遺産といえます。

上原濡原遺跡

沖縄で最も古い約二千八百年前の原初的な農耕跡と考えられている遺跡です。その痕跡は、作物を栽培するために平行に細長い溝を掘った溝列と用水池・焼土面などです。本遺跡は、東アジアにおける植物栽培の在り方を知るうえで特に重要な歴史・文化遺産といえます。

また、野高タマタ原・上原濡原遺跡は、古老が語る土地が肥沃とされるヂーシル（地汁）がしみ出るクルマーシ（黒真土）の場所にあります。



△新城古集落の発掘調査



△野高タマタ原遺跡の発掘調査



△上原濡原遺跡の発掘調査

問合せ：文化課 ☎893-4430

茶ぐわーゆんたく

107

普天間橋について

戦前、普天間川には佐阿天（サー）橋と普天間橋の二つの橋が架かっていました。今回はその一つ普天間橋を紹介します。

普天間橋は普天間部落と安谷屋部落（当時は中城村、現在は北中城村）の境界を流れる普天間川に架かる、美しいアーチ型の石橋で、地域によっては石平橋とも呼ばれます。現在の石平人道橋あたりに架けられていました。

当時歌われた琉歌に、次のようなものがあります。

フティマ高橋ヤ
タガカキティウチャガ
スイヌサングワチャーガ
カキティウチャサ

（普天間高橋は、誰が架けたのだろう
首里のサングワチャーという大工が
架けたんだとき）

この歌にも歌われている通り、普天間橋は首里の石大工によって架けられたものだといわれています。

橋のすぐ下流には馬に水浴びをさせる場所があり、橋のすぐ上流は、子どもたちの泳ぐ場所でした。

また1902（明治35）年に中部地方の農産物を首里、那覇へ運ぶ普天間街道が整備されてからは、主要な道路の一部となり、普

天間参詣などでも賑いました。

ところが戦時中は整備されている石橋や街道は、米軍の進攻を容易にするものと考えられ、1945（昭和20）年、米軍の進攻を防ぐため日本軍は普天間橋を爆破しました。

石造りの普天間橋は本土復帰後も普天間、安谷屋住民の生活道路として、また、悲惨な戦争の証として現状保存が望まれました。しかし、1981（昭和56）年に河川改修工事のため、撤去され、鉄骨の橋に架けかえられ、現在の姿になりました。



1945（昭和20）年 日本軍に爆破された時の普天間橋

『宜野湾市史』への問合せ
文化課 市史編集係（市立博物館内）

☎870-9317